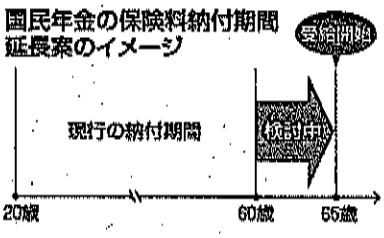
10/25 朝日

国民年金保険料「65歳まで納付」

賛成多数、検討加速へ

厚労省審が議論



社会保障審議会（厚生労働相の諮問機関）の部会は24日、国民年金（基礎年金）の保険料納付期間を現行の20歳以上60歳未満の40年間から、65歳になるまでの45年間に延長する案を議論した。委員の多数が賛成意見を述べたため、検討は加速しそうだ。少子高齢化の中で財源を増やし、受け取る年金の水準低下に歯止めをかけるのが狙い。2024年末に結論を出し、25年の通常国会で関連法改正案の提出を目指す。

委員からは「このままだと基礎年金だけでは生活が成り立たなくなる可能性があり、延長したほうがいい」「平均寿命が延び、働ける高齢者は保険料を支払うべきだ」などの意見が出た。

60歳以降に働かない人や自営業者らは保険料負担が長引くことになり、反発も予想される。65歳まで働く会社員らは今も保険料を払っており延長しても負担は変わらない。

基礎年金を給付する財源の半分は国庫負担で賄う。部会では延長後も負担割合を維持すべきだとの指摘があった。追加費用確保策が課題となり、議論を続ける。

国民年金は23年度、保険料は一律で月1万6520円。保険料を40年間納めた場合の受給額は月約6万6千円となる。

支え手減少、働く高齢者増 背景

国民年金（基礎年金）保険料の納付期間を65歳になるまでの45年間へ延長する案が検討されている。想定を上回って進む少子高齢化で制度を支える現役世代が減っていく一方、長生きする高齢者は増え、将来の受給水準が低下するという懸念がある。政府は改革を急ぐが、負担が重くなる人もいるため、丁寧な議論が求められる。

厚生労働省が2019年に公表した試算によると、現役世代の手取り収入と比べた基礎年金の受給水準は36・4%だったが、経済成長が標準的なケースで40年代後半には26・2%まで低下する。

目減りは、将来の年金原資を確保するため受給水準を計画的に抑える「マクロ経済スライド」という仕組みがあるためだ。

国民年金の23年度の給付額は保険料を40年間納めた満額で月約6万6千円。納付期間が延長されれば機械的な計算で12・5%増の月約7万4千円となる。40年代後半の受給水準も、26・2%から30・0%へ改善すると、少子高齢化で徐々に目減りする見込み。厚労省はこのままだと40年代半ばに約3割減ると試算する。

公的年金は基礎年金に、保険料を長く納めれば、その人が将来受け取る名目上の額は増える。一方、現役世代の手取り収入と比べた基礎年金の受給水準で見る見通しだが、19年度比での目減りは避けられない。

基礎年金に上乗せされる「2階部分」の厚生年金に加入しながら60歳以降も働く会社員らが増えていることも検討の背景にある。

現在は基礎年金の保険料の納付期間が60歳未満のため、60歳以降の就労期間中に支払った保険料は基礎年金に反映されない。延長が実現すれば、保険料率は変わらないまま基礎年金に反映されて受給額が増える。

基礎年金給付の半分は、国庫（税金）で賄われており、納付期間を延長する場合、財源をどう確保するかが焦点となる。

会社員らの厚生年金が上乗せされる。部会では厚生年金財源の一部を基礎年金に配分する案も議題となったが意見交換にとどまった。

受給水準低下 歯止め策

厚生労働省の審議会部会で国民年金（基礎年金）の保険料納付期間を延長する案が議論されました。

Q 国民年金とは。

A 原則として20歳以上60歳未満の全員が加入する公的年金です。自営業者や無職の人たちが入ります。会社員や公務員は国民年金に上乗せする形で厚生年金にも加入しています。

Q 厚労省の案は。

A 現行制度での保険料納付期間は20歳以上60歳未満の40年間ですが、これを65歳になるまでの45年間とする案です。

Q なぜ45年間とする必要があるのですか。

A 公的年金は現役世代の保険料でその時の高齢者を支える「仕送り方式」です。少子高齢化で現役世代が減り高齢者が増えれば、将来世代の年金水準が大幅に低下する恐れがあるため、歯止め策が求められています。

Q 課題は。

A 65歳まで働く会社員らの負担は変わりませんが、60歳以降は働かない人や自営業者は保険料を払う期間が長くなります。また、国民年金は税金で2分の1を賄っています。受給額が底上げされればその分、税負担も増えるため、財源確保も課題となります。

—Q&A— 国民年金 納付期間延長案

年金の受給水準 受給が始まる際の年金額が、どの程度の水準にあるかを示す。現役世代の所得に対してどれくらいの割合かを表す「所得代替率」や、物価上昇率を考慮して計算した年金額で示される。日本の公的年金は現役世代が納める保険料を今の受給者に充てる「賦課方式」のため、平均寿命の延びや少子化の影響などで、将来的な受給水準は低下する見通しだ。